日刊）　昭和15年8月17日第3種郵便物認可

日刊工業新聞
THE NIKKAN KOGYO SHIMBUN
1月13日水曜日
2016年（平成28年）

TYPE OF INDUSTRY

科学技術・大学

拓く研究人 105

感性定量化 モノづくり支援

電気通信大学大学院情報理工学研究科教授 坂本 真樹 氏（46歳）

「さらさら」「しっとり」「さっぱり」など日本語に豊富に存在するオノマトペ（擬音語や擬態語）。電気通信大学の坂本真樹教授は言語学の専門家としてオノマトペに着目し、さらに工学と組み合わせることで「感性を定量化する」新しいシステムを開発した。文理の壁を飛び越え、「感性情報学」の研究領域で活躍する。

坂本教授が目指すのは、オノマトペで表現された言葉を通じて、人の五感や感性を可視化すること。人は言語化の過程で感性を抽出しているが、言葉は主観的であいまいだ。これを客観的に評価できれば、「顧客の要求を十分に満たしたり、モノづくり現場のコミュニケーションをより円滑にしたりできる」と考えている。

これまで、聴覚や視覚、触覚、味覚に関するオノマトペを評価する手法を考案した。音と五感を連想させたシステムは、例えば「もふもふ」と入力すると、「温かく、柔らかい」といったように43種の感性尺度で印象が表され、イメージに合う色まで提案する。

産学連携も活発に行う。カルソニックカンセイとの共同研究では、自動車部品に使う模造金属のデザイン制作に関わった。「つるつる」しがちな模造金属につやを落とす加工を施し、実金属の「ざらざら」した質感に近づけて高級感を持たせた。視覚と触覚のオノマトペをモノづくりに生かした成果だ。

キリンとは味覚に関する研究を行っている。味覚では、例えば「とろーり」を「まろーり」と表現すれば、「より強いとろみを表現できる」（坂本教授）。食品・飲料の味や食感の新表現の開拓につながりそうだ。今後は「嗅覚の定量化にも挑戦したい」と坂本教授は意気込む。

顧客を持つ企業ならどんな業種でも連携は可能とし、「感性に基づくモノづくりを支援したい」と話す。将来は、気分や好き嫌いまでオノマトペで解明することを狙う。「オノマトペ図鑑」を作るという目標もある。

開発したシステムは2014年度の人工知能学会論文賞を受賞した。学術から産業まで広く貢献するだけでなく、最近では一般向けの著書「女度を上げるオノマトペの法則」も出版した。その反響でテレビ番組にも出演し、お茶の間でも人気を博す。

（藤木信穂）

（水曜日に掲載）